

先生と教え子の同窓会 10

「やってみる」が未来を拓く

臨床に強い管理栄養士を育てる教育とは



管理栄養士を育てた恩師と現場で活躍する教え子が再会し、過去のエピソードや管理栄養士への思い等について対談する本連載。今回は、帝塚山大学食物栄養学科准教授の阿部咲子先生と社会医療法人高井病院管理栄養士の木村満さんに語っていただきました。



木村 満氏

社会医療法人高井会
高井病院
管理栄養士



阿部咲子氏

帝塚山大学
食物栄養学科
准教授

現場で学ぶという原点
老健での経験が拓いた道

阿部先生(以下、阿部)●在学中、木村さんを近隣の老健に連れて行ったのは、「研究」というより実践の場を見せたいという思いが強かったからです。脱水や浮腫、低栄養のときに皮膚や口腔内がどう変化するか。教科書ではなく、実際に触れて感じてほしかった。病院就職を希望しているというのとだったので、「実践の場を見られるよ」と声をかけました。

木村さん(以下、木村)●あの老健での経験が、その後の研究の出発点になっています。学生同士で計測していたときはスムーズにできても、実際の現場では対象者の状態や性格によって、思うようにデータが取れませんでした。その難しさを体感できたのは大きかったです。だから今は、患者さん一人ひとりのタイプを考えながら、どうすれば適切に評価できるかを意識しています。

阿部●老健での研究では、学生は記録係から始め、慣れてきたらMMS Eや下腿周囲長(CC)の

測定も任せました。フィジカルアセスメントや利用者さんとのコミュニケーションを学べることは、就職後に必ず生きてきます。

老健での取り組みを卒業研究にまとめ、就職1年目でJSPEN(日本栄養治療学会)での発表までした。発表直後に取材が来るほど注目されましたし、今もその研究をベースに、勤務先でデータを取り続けて新たな研究を始めています。勤務2年目で、業務と研究を両立しながらここまでできる人は、そう多くありません。そして、現在は後輩にあたるゼミ生に対してゼミ研究を通じて実践の場を提供できるよう、準備を進めています。

授業と臨床をつなぐ
「触れる」「聴く」学び

阿部●大学では、できるだけ実践の場につながる教育を意識しています。たとえばCCを測ることで、浮腫や低栄養の皮膚の状態を実際に触って確認できる。臨床栄養学



実習では、嚥下音を聴かせたり、浮腫モデルを使用し、重症度を実際に体感できる学習を行いました。

VFで顕性誤嚥と不顕性誤嚥の違いを動画で示すなど、臨地実習より一歩踏み込んだ内容です。

木村●学生時代に、嚥下の音や浮腫の状態を実際に体感した経験が、就職後の臨床現場で活かされています。サルコペニアや摂食嚥下の研究をしています。当時の経験がベースになっています。

阿部●学生には、「就職1年目で学会発表した卒業生がいる」と伝えていきます。そうなりたいなら、卒業研究は全力でサポートする。

病院で働くという選択
そしてその先へ

木村●病院で管理栄養士を目指す原点は、小学3年生のときの入院経験です。入院中の楽しみは食事で、毎日献立表を見るのが好きでした。その後、シエフに憧れて調理師免許が取れる高校に進み、大学で管理栄養士資格取得を勧められたとき、その記憶がよみがえりました。患者さんに楽しさを提供し、寄り添える仕事がしたいと思っただけです。

現在は病院で、病棟の栄養管理



と栄養指導を担当しています。最近病棟に出る機会も増え、看護師や医師から栄養の相談を受けることもあります。急性期患者に対して、経管栄養の内容を医師と相談しながら、毎日調整していく。その積み重ねが信頼につながっていると感じます。

阿部●新人は3年ほど新人扱いされることも多いですが、すでに医師から頼られている。現場で学んできた強みですね。

木村●現場の医師から受けたアドバイスは、若い人は基準を大事にする傾向があって、それが必要ですが、最終的には患者さん一人ひとりとを見て考えることが大事だと。その姿勢を、これからも大切にしていこうと考えています。

後輩には、チャンスがあれば積極的につかんでほしいです。無理かも、と考える前にやってみる。阿部先生は、そうした機会を与えてくれましたので、消極的にならずチャレンジしてほしいですね。



阿部ゼミの皆さん